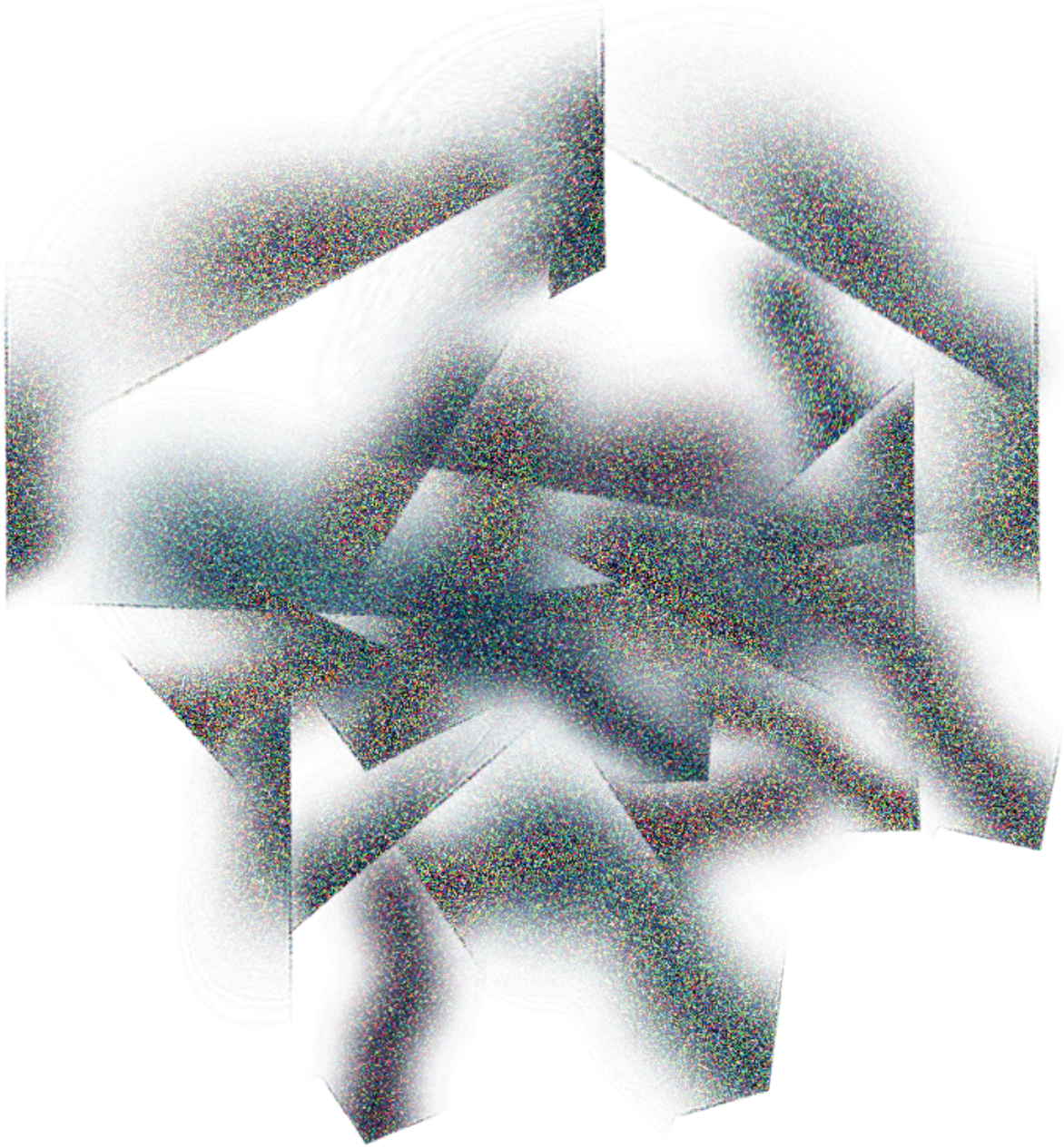


ロームシアター京都 × 京都芸術センター U35創造支援プログラム "KYOTOU"

演出：福井裕孝／吉野俊太郎

デスクトップ・シアター

2021年7月2日(金)→4日(日)
ロームシアター京都ノースホール

DESK-TOP THEATRE
Fukui Hirotaka, Yoshino Shuntaro

Our Desktop / B Design: Akitsu Sakke

ロームシアター京都×京都芸術センター　U35創造支援プログラム “KIPPU”

『デスクトップ・シアター』

公演日時

7月2日㊎ 14:00・19:00 ／ 7月3日㊏ 14:00★・19:00 ／ 7月4日㊐ 15:00☆

★託児サービスあり（要事前予約・定員有）詳細はロームシアター京都WEBサイトをご確認ください。
☆観劇サポート／多言語字幕タブレット貸出あり（要事前予約・定員有）日本語・英語に対応した多言語字幕タブレットの貸出サービスがあります。
　ご希望の方は、fukui.theater@gmail.comまでお申し込みください。※今回はモニター実施のため、英語以外の言語はAI 翻訳となります。

チケット料金［ ブロック指定・自由席 ］当日券は各種＋500円になります。

前方席‥　一般：3,300円　U29：2,800円　高校生以下：1,500円
後方席‥　一般：2,800円　U29：2,300円　高校生以下：1,000円

※座席の詳細についてはWebサイトをご確認ください。　※未就学児の入場可（料金無料）。　※U29および高校生以下のチケットをご購入の方は年齢や身分を証明できるものを当日ご持参ください。
※車椅子および観劇サポートの字幕タブレットをご利用の方は上記のチケット料金より1割引き、介助者の方1名までは入場無料となります。ご利用の方は、fukui.theater@gmail.comまで、事前に必ずご連絡をお願いいたします。
※ご来場前に、ロームシアター京都ウェブサイトにて「ロームシアター京都主催事業公演実施時のご来場に際して」（新型コロナウイルス感染予防の対策について）を必ずご確認ください。

チケット発売日

先行販売　2021年5月8日㊏《フレンズ会員・club会員・京響友の会会員》／ 一般発売　5月15日㊏

チケット取扱

ロームシアター京都 オンラインチケット	https://www.e-get.jp/kyoto/pt/ 〈24時間購入可 ※要事前登録（無料）〉
ロームシアター京都 チケットカウンター	TEL. 075-746-3201〈窓口・電話とも10:00～19:00／年中無休 ※臨時休館日を除く ※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため短縮営業する場合あり〉
京都コンサートホール チケットカウンター	TEL. 075-711-3231〈窓口・電話とも10:00～17:00／第1・3月曜日休館 ※休日の場合は翌日〉
京都芸術センター チケット窓口（西館1階 事務所横窓口）	TEL. 075-213-1000〈窓口・電話とも10:00～20:00／年中無休 ※臨時休館日を除く〉
パスマーケット	https://passmarket.yahoo.co.jp/event/show/detail/02h0gq4hshj11.html 〈24時間購入可〉

会場

ロームシアター京都 ノースホール

京都府京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL. 075-771-6051（代表）／075-746-3201（チケットカウンター）　FAX. 075-746-3366
https://rohmtheatrekyoto.jp/
※営業・開館時間は状況により変更することがあります。最新情報はお問合せください。

○京都市営地下鉄東西線「**東山**」駅下車1番出口より徒歩約10分
○市バス 32・46系統、京都岡崎ループ「**岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前**」下車すぐ
○市バス 5・100・110系統「**岡崎公園 美術館・平安神宮前**」下車徒歩約5分
○市バス 31・201・202・203・206系統「**東山二条・岡崎公園口**」下車徒歩約5分

演出：福井裕孝、吉野俊太郎
出演：石原菜々子、今井彩乃、小坂浩之、小中 葵、
　　斉藤ひかり、篠原加奈子、鶴田理紗、野村眞人、宮田直人
舞台美術：古舘壮真　　舞台監督：小林勇陽
照明：渡辺佳奈　　音響：林実菜　　映像：小西小多郎
宣伝美術：明津設計　　ドラマトゥルギー：朴建雄　　制作：黒木優花
主催・製作：福井裕孝
共催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
　　京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）京都芸術センター KYOTO ART CENTER
　　京都市
協力：一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構 JDPA
　　ジャグリング・ユニット・フラトレス、白昼夢、プリッシマ、kondaba
助成：公益財団法人全国税理士共栄会文化財団

U35創造支援プログラム KIPPU ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム“KIPPU”
主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
　　京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）
　　京都市
助成：令和３年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業 文化庁

問い合わせ　E-MAIL: fukui.theater@gmail.com
　　WEB: https://www.fukuihirotaka.com

※新型コロナウイルス感染症の状況次第で情報が変更になる場合がございます。最新の情報については、福井裕孝のウェブサイトやTwitterをご確認ください。

福井裕孝　*Fukui Hirotaka*（演出）

1996 年京都府生まれ。人・もの・空間の関係を演劇的な技法を用いて再編し、その場の状況を異なる複数のスケールやパースペクティブから捉え直す。近年は、天井・周壁・床面によって仕切られた「部屋」という空間単位との関わりのなかで作品を製作する。主な演出作品に『インテリア』（2018, 2020）、『マルチルーム』（2019）、『シアター・マテリアル』（2020）など。

吉野俊太郎　*Yoshino Shuntaro*（演出）

1993 年新潟県生まれ。2019 年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。2017 年、卒業制作作品「門」にて首席。同年、Royal Academy Schools（英国）へ交換留学。2019 年に東京都小平市にて共有スペース「WALLA」をオープン、以降共同運営に携わる。現在は東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程に在学中。専門は彫刻、研究テーマは「操演」。主に台座や道化、人形や奇術などを調査検討し、彫刻物の自我とその演出法に関する研究を行っている。

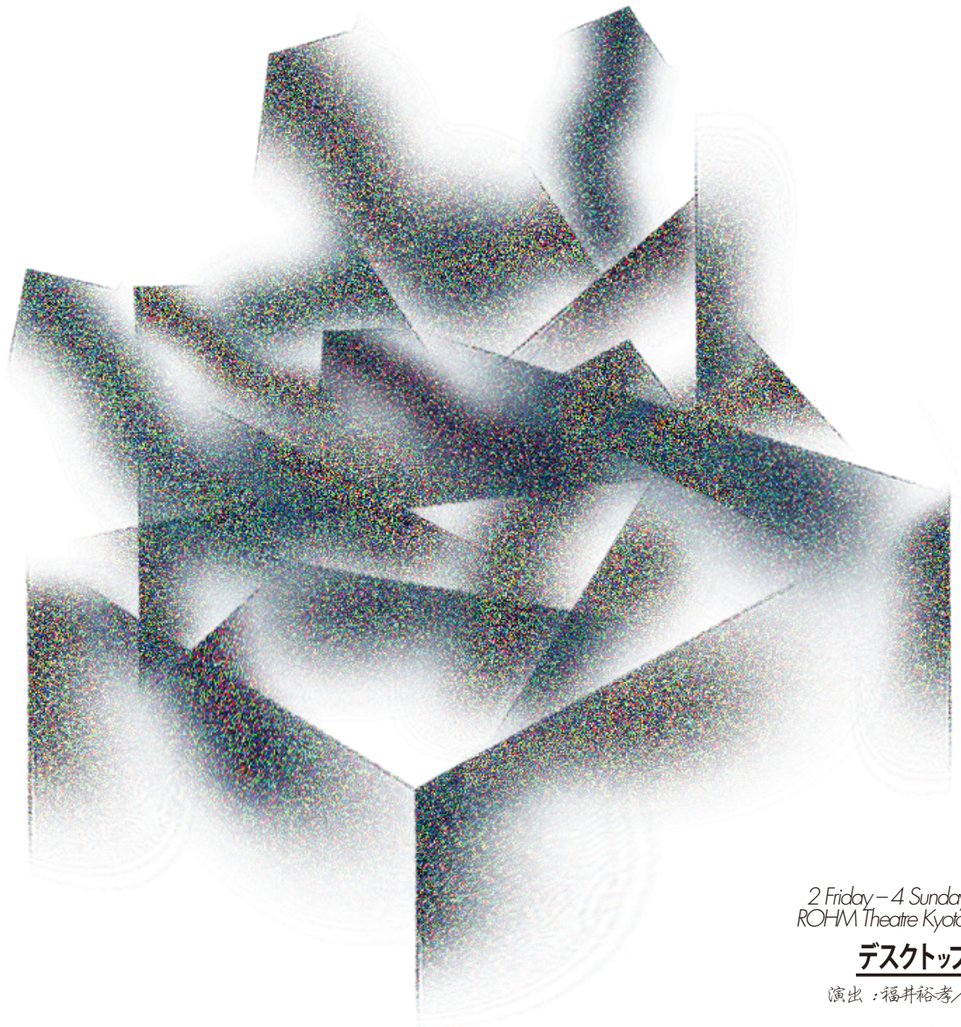
古舘壮真　*Furutate Sohma*（舞台美術）

1995 年愛知県春日井市生まれ。東京を拠点に活動。空間内に存在するあらゆる関係性に着目し、独自のアプローチでデザイン・制作を行う。素材そのものの鮮度を大切にしながらも、人・モノ・空間への効果的な造形表現を重視し、素材がもたらす新しい機能や価値観、ストーリーを生み出す可能性を探る。発表の場は国内外を問わず、多数のライブラリーに作品が収容されている。2019 年に武蔵野美術大学を卒業、現在はインハウスと自身の制作を並行して活動している。

DESKTOP THEATRE

ROHM Theatre Kyoto × Kyoto Art Center U35 Creation Support Program “KIPPU”
Fukui Hirotaka, Yoshino Shuntaro

DESKTOP THEATRE



2 Friday – 4 Sunday, July, 2021
ROHM Theatre Kyoto North Hall

デスクトップ・シアター

演出：福井裕孝／吉野俊太郎

“Our Desktop /T”　Design: Akitsu Sekkei

ロームシアター京都
ROHM Theatre Kyoto

ただテーブルの上を舞台にすることに決めたので『デスクトップ・シアター』。

——福井裕孝

人とものの関係を考えるというような漠然としたイメージよりも、
もう少し具体的というか、
日々の営みの中でのそれを前提にして、
人とものが共同・共演する場を構想するなら、
舞台は劇場ではなくテーブルになるんじゃないか。
テーブルは常に人ともの、
また人と人の間にある。
地面から切り離され（脚に支えられ）宙に浮かぶ平面上には、劇場よりも純粋な空間が広がっている。
そんなわけで、
テーブルの上で上演しようと考えた。
試演をやった2年前も今も、
テーブルの上で何をやればいいのかはよくわかっていない。

演劇の下半身にもあるのではないか、とか。

——吉野俊太郎

たとえば文楽における人形が操演者なくして歩くことができないように、
人形は黒衣を含めてで一体で、
つまり人形を地から支持する下半身が黒衣である。
デスクトップも〝トップ〟であって、
〝トップ〟であるということは〝ボトム〟もあるはず。
こちらにもまた、
支える下半身の存在が仄めかされている…
だから本企画の正しい名称は『デスクボトム・シアター』でもあるのでは…
なんて思い巡らしつつ、
僕は演劇そのものにおいて下半身とは何なのかが気になってしまって今は仕方がない。
ただの支持体にはない珍奇な主体性が、

テーブルの上の空間を舞台に上演する『デスクトップ・シアター』。KUMA EXHIBITION 2019（東京・スパイラルガーデン）での試演から2年を経て、
会場をブラックボックスの劇場空間へと移し、新しい出演者と新しい演出体制で創作を再開します。今回は、普段舞台や客席の足場として使用されている劇場のマテリアルを地面から持ち上げ直し、
文字通り「劇場」をテーブル化することから始めます。劇場からテーブル、テーブルから劇場へ。異なる二つのスケールを往還しながら、人とものが共同する新たな舞台のかたちを追究します。